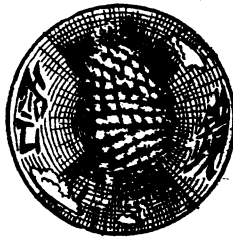


**気象評論ありや又なしや** 世には評論家と称する輩がある。彼等は自ら政治を運用せし経験なくして政治を批判し、自らは三文小説をもかくすべを知らずして文学を論じ、自らは映画観賞に埋没して、しかもこれが演出を悪言罵倒してはばからないのである。さればこそ文学者と文学評論家の間にはしばしば舌戦がたたかわされ、「ソナラオマエガヤッテミロ」と逆襲され、評論家も又酷評される運命から免れることはできなかった。かつて失言でクビになった池田蔵相は大学の先生方が経済のことを云々するなど全く片腹痛しと広言したと伝えられる。

しかし、政治家が果して政治をよく知っているであろうか。映画俳優必らずしもよく映画を知るものではあるまい。おなじく学者必らずしも学問を知らず、技術者必らずしも技術を理解していないのである。多くの場合彼等はそのせまい専門分野の職人徒弟であり、親方であるに過ぎない。ここに学問の評論も必要となるのであり、たとえば気象評論の要請される理由がある。

従来科学の評論は科学史家と啓蒙家達の余技であった。しかし、今日、科学史研究の分化、専門化に伴い、科学評論も又専門化する段階に來たと考える。科学史の尊重されないこの国では科学評論も又歓迎されないにちがいない。しかし鐘はすでに鳴りはじめたのである。「誰がためにも鐘は鳴る」である。(ジャー)



「貴方はほんとにお天気屋ね」と怒る彼女があれば、「女心と秋の空」を歎く彼氏もある。およそ天気ほど移り気なものはないようである。この天気を記録する気象観測法——これがまたしばしば変わり、この1月に再び改正される。

より正確な観測をし、またたえず前進してゆく社会の要求に適応できるような気象資料をうるために観測法の近代化はもちろん必要であろう。しかしこの改正をしようとするときには、今迄の方法が決められた時のいきさつを十分に研究してから手をつけてもらいたい。

また一般法規と気象観測法の大きな違いは、それを基にしてえられた観測資料が、また気候資料として、永年にわたって、気象観測法などあまりよく知らない沢山の気候学者によっても使われることである。

一種のノイローゼかもしれないが、しかし、いやしくもこのような観測法を改正するときには、一般の研究者にも安心して過去の数字を取扱うことができるように、過去における諸改正の細かい一覧表でも観測法の末尾に附録することが当局の当然行うべき義務であろう。

このようなことはただ気象台だけを責めるものではなく、世界気象機構(WMO)に対してこそ強くもの申したい点である。WMOの施策が目先のことに走ることも多く、歴史を軽んじ、気象史の分科会を持たぬことも大いに不満である。(K.W.)

**長期予報と凶作** 日本の長期予報は東北凶作の防止を自途として発達したと言っても過言でないであろう。然し日本の農業技術と農民の生活を考えた時長期予報がどの程度役に立つかは一寸疑問である。というのは日本の稲作技術は、農民の生活程度が極端に低く、アジア並みと言われる貧困さのために、品種改良と世界に類を見ない多肥によって裏付けられているからである。このような農業技術は長期予報の利用度を著るしく低くする。なぜなら品種は播付け前でなくては代える事ができないし、肥料の大部分も又田植前に基肥として施されるので、それ以前の予報しか利用できないからである。然し上記の期間以前に非常に正確さで予報が行われぬ限り貧困な農民は多肥、多収獲品種を選ぶだろうし、技術官僚も対冷技術を農民に指導しないだろう。更に播種直前に凶冷が確定したとしても、現在の制度の下では耐冷品種の採用は一部富裕な農民層に限られ、他の大部分の農民などの程度行きわたるか一寸心配である。このように半年以上も先に夏の気温を殆んど確実に予報する事を必要とし、もしそうでないと余り役に立たないという事は我々技術者の心を暗くする。然し最近はその程長くない期間の予報の適用できる水温上昇その他の技術が確立されつつある事は我々の心を明るくするが、これらの技術も農民の自己資本によりどれ丈採用できるだろうか。

(Ka)

**無用な過去か** 最近、パナールの「歴史における科学」を読んでいるが、その中に次の一節がある。われわれ気象学者、気象技術者にとっても問題になることであり、気象学、気象技術を学んでいるわれわれが、うっかりはまりこんでしまう溢路でもあるので紹介しておきたいと思う。

『科学においては、人間の他のどんな制度におけるより以上に、現在を理解し未来を統御するために過去を調べ上げることが必要である。このような主張は、少くとも最近までは、現役の科学者たちからほとんど支持されなかった。自然科学、特に物理的科学においては、現代の知識は過去の全知識を廃棄してそれにとって代るものだという思想が固く支持されている。将来の知識がやがては現在の知識を廃物にしてしまうが、さし当りは現在のものが許される最善の知識である。ということが認められている。以前からの有用な知識は、すべて現在の知識の中に吸収されており、無視されているものは、知らないためについうっかり落しただけのことだ、というのである。』

パナールはその後で、現在はこのような考え方は間違ったものであると認識するようになっていっているが、われわれ気象界でははたしてどうであろうか。

(Johe)